

ドイツ・バイエルンの農村は今

——石見神楽&未来農業研究団バイエルンツアー報告 最終回

川村 一成(奈路・農業)

「ツアーの面々

北は山形、南は大分まで、全国各地から集まって編成された私たち農業研究団は、『自分以外は皆ひとくせある変わった奴らだ』とだれもが思っていた節がある。

出発の朝も農作業をしていて、着替えもせずに駆けつけ、深夜シーズを洗う奴、夜明け前から起きて、毎朝いろいろな果物を市場で買ってくる人、ドイツ語翻訳機片手に一人で農家へ飛び込み、いろいろ話を聞いてくる者、「遅刻者



ミュンヘン州食糧農業省の前で山形県のメンバーと撮影

は置き去り」を逆用して、そのまま飲み続け、深夜まで宿に戻らない連中、戸数百戸の村で軒灯もない居酒屋を嗅覚で捜し当て、地元のおじさんたちと交流してくる飲み助たち、「せっかくだからちよつと」とオーストリアへ行ってコンサートを聞いてくる輩、ベルリンでみんなと分かれ、一人ポーランドへ行った奴、そして行きの機内で知り合い「面白そつだ」と言って、いつの間にか一員となつてずつと同行し、通訳やガイドでも大助かりだったドイツ在住の日本人医師など、愉快で楽しく、行動力のある人たちがばかり。

「あ、あ、トウキョオ」この度のバイエルンツアーで、農業や農村は、食糧生産の場であるばかりでなく、自然や景観を維持するためにも絶対に滅ぼしてはならないものという強い信念と合意のもと、さまざまな手厚い施策を講じている州政府と、それに答え、自信と誇りを持ちながら『ほどほどに貧しく悠然と』生活するバイエルンの人々に接することができ、大きな感動と心地よいカルチャーショックを受けた。ところが、東京まで帰ると、

別の意味でがく然とした。灰色の街に小さな家が密集しているかと思えば、ばか高いビルが無秩序に建ち並び、コンクリートで固められた川を汚れた水が流れている。これでもか、これでもかと広告の看板はその大きさとけばけばしさを競い、その下を人々は途切れることなくあくせくと西に東に走っている。

これが経済大国ニッポンの都の姿か。豊かさの尺度を経済面ばかりに求め、お金に換算できないものを切り捨ててきたことの集大成をそこに見たような気がする。

「だれもが住みたい」
南国市に

私たちの住む南国市には、海岸地帯から田園地帯、街、そして山間地帯と、多様な生活空間があり、幸いにもまだまだ豊かな自然が残っている。二十一世紀を目前にした今、経済的発展のみを追い求めるあまり、東京や高知市のミニチュア版と成り果てることなく、この多様な生産と生活の場を大切に守り育てていくこ